

中級におけるビジターセッションの意義と問題点 —立命館アジア太平洋大学のケース—

寺嶋 弘道、板橋 民子、佐々木 美江、戸坂 弥寿美

アブストラクト

本研究では、過去 10 年以上にわたり立命館アジア太平洋大学で取り入れてきたビジターセッションが中級の日本語学習者にとってどのような意義や問題点があるのか、そしてその問題点をどのように改善するべきかを考察した。

インタビュー形式と発表形式のビジターセッションに参加した学習者への質問紙調査及びインタビュー調査の結果から、ビジターセッションは学習者が地域の人に対して良い印象を持つきっかけになり、日本語で話す自信を与えたことがわかった。しかし、ビジターセッションは地域の人との交流をしたいという意識を高める要素としては不十分であることもわかった。

問題点として、インタビュー形式のビジターセッションは日本語を話す時間が少ない学習者にとって怖さやストレスを感じるものであるということが明らかになったが、インタビュー形式と発表形式の機会を合わせて提供することで、達成感や自己の言語能力の向上を感じさせることができるということもわかった。また、言語能力や会話を続けるストラテジーの不足、ビジターへの不安や遠慮、相手との相性やバラエティーなどについて教師側が配慮する必要性があることも明らかになった。

キーワード：ビジターセッション、地域の人、インタビュー、発表

1. はじめに

日本語学習者に母語話者とインターアクションを行わせる一つの方法として、ビジターセッションがある。ビジターセッションというのは、日本語母語話者にビジターとして日本語学習者の発表や会話練習、ディスカッション、インタビューといった教室での学習活動に参加してもらい、学習者に日本語母語話者との接触場面を提供するものである。通常の教室活動では教員を除けば、日本語学習者同士のコミュニケーションが中心となる。しかし、ビジターセッションを行えば面識のない母語話者とのコミュニケーションを行わせることができる。そのため、ビジターセッションは、教室の場面を実際のコミュニケーションの場面へ近づけるのに有効である（ネウストブニー1991）という。また、ビジターに協力してもらえば、バラエティーに富んだ日本人との接触の機会を与えられるだけでなく、母語話者に教師の知識を補うようなアシスタントとしての役割を担ってもらうこともできる（トムソン他 1999）。そのような利点から、ビジターセッションは現在、様々な教育機関で取り入れられている。

立命館アジア太平洋大学（以下 APU）においても 2000 年の開学以来、地域からのビジターを迎え、ビジターセッションを継続的に行ってきた。APU でビジターセッションを取り入れる目的は、先行研究と同じように、教室では体験しにくい、面識のない日本語母語話者とのコミュニケーション場面やバラエティーに富んだ日本語母語話者と接触する機会を学習者に提供すること、そして、教師以外の様々な日本語母語話者とのコミュニケーションを通じて知識を獲得してもらうことである。また、このビジターセッションをきっかけに学習者と地域の人とのコミュニケーションを促進するという効果も期待している。

しかし、これまで APU でのビジターセッションを振り返った報告はなく、ビジターセッションの意義や問題点が何か検証されないまま運営されているのが現状である。そこで、本研究では中級レベルのクラスで行った 2 回のビジターセッションに対して学習者がどのような意識を持ったのかを質問紙とインタビューで調査を行い、今後の中級のビジターセッションに向けてその意義や問題点、改善法について考察した。

2. APUにおけるビジターセッション

APUは日本語と英語で二言語教育を行っており、2012年5月の報告によれば、学部生5,427名のうち留学生が42%を占めている。そのうちのほとんどの留学生は英語で専門講義を受けながら、日本語を初級レベルから学習している。APUでは大学での事務処理や大学から提供される情報にも二言語が使用される。そのため、大学内では日本語を使用しなくても不自由しない環境が整っている。また、大学や学生寮¹は市街地から離れた山の上にあり、特に学生寮に住んでいる留学生は地域の人と接触できる機会が少ない。さらに、留学生は学内外で同地域出身者と話す場合もある。同地域出身の留学生同士であれば、日本語や英語以外の言語で話すことも多いようだ。このような理由から、日本語学習を進めても日本語の使用機会が少ない学習者もいるのが現状である。

以上のような背景から、APUの日本語クラスでは地域から人を招き、ビジターセッションを実施している。最初は教員の知り合いに依頼して参加してもらう形態から始まったが、徐々に口コミを通してビジターを増やしてきた。開学から2012年現在まで500名以上のビジターが地域ボランティアとして参加しており、現時点で約370名が登録されている。

APUでは毎学期の最初にビジターセッションのコーディネーターが開講されている全ての日本語クラスの担当者に連絡を取り、ビジターセッションを行う意志の有無や具体的な日程、内容を聞く。そして、それらの情報を取りまとめて、毎学期、ビジターセッションのスケジュールが10日²ほど組まれている。その後、ビジターセッションの案内を作成し、約370名の登録者に郵送している。参加者は当日、一つの教室に集まってビジターセッションのコーディネーターからの説明を受け、その日に入るクラスに振り分けられることになる。参加人数は当日までわからないが、平均で1回35名ほど、少なくとも20名のビジターが参加している。

ビジターセッションは日本語の授業がある平日に行われるため、ビジターには主婦や退職者が多い。その中には、海外滞在経験がある人や外国語に堪能な人、日本語を教えるボランティアに参加している人など、外国人と接した経験が豊富な人もいるが、外国人と接したことがほとんどない人もいる。

3. 中級におけるビジターセッション

中級クラスは初級で250時間日本語を学習した後、主として1年生の後期に留学生が登録するクラスである。このクラスではAPUの到達目標に合わせて作成した教科書を使用し、4技能を総合的に身に付けることを目標にしている。このクラスの特徴は、教科書を使用して学ぶだけでなく、そこで学んだ知識を実際に運用できるよう、外部のリソースを活用しながら学ぶ機会を取り入れていることである。その取り組みとして、2010年春学期からはCMの作成(板橋2012)や地域の商店街の調査といった活動を実施している。活動の内容は各学期の担当講師が話し合い、決定するが、グループ活動であることと、外部のリソースを活用すること、学期の最後に活動発表会として他クラスと合同で成果を発表することは共通している。中級クラスではこの活動の中でビジターセッションを行うことが多く、学習者がビジターから情報やアイデア、アドバイスをもらうなどして、外部の人的リソースを活用してきた。

2011年秋学期の中級クラスは活動のテーマを「日本のお正月」とした。グループで日本のお正月に関連したテーマの一つ決め、ビジターセッションや外部でのインタビューなどで得た情報を基に発表した。その活動の流れを表1に示す。

学習者は、この活動の中で2回のビジターセッションに参加した。1回目のビジターセッションでは、各グループで決めた、お正月の食べ物や初詣といったテーマについての質問を学習者が事前に準備しておき、ビジターにインタビューをして各グループのテーマに関連した情報を収集した。2回目のビジターセッションでは、インタビューやインターネットなどで得た情報をまとめて準備したものを、グループごとにビジターの前で発表し、本番に向けてのアドバイスやフィードバックをビジターからもらった。どちらのビジターセッションも4~5名の学習者のグループに、1~2名のビジターが参加した。

¹ 留学生は基本的に1年生の間は入寮することになっている。

² 1日に1つから3つの時間帯が設定され、1つの時間帯に1クラスから5クラス程度が参加する。

表1 2011年秋学期 中級クラス「日本のお正月」

日程	内容	
1週目	読解：日本のお正月について 作文：出身地のお正月について	
2週目	発表：出身地のお正月 ※テーマを絞る	質問紙1
3週目	ディスカッション：どんなテーマで発表するか	
4週目	ビジターセッション1回目（インタビュー形式）	質問紙2
7週目	会話試験：模擬インタビュー（1人5分程度）	
7週目～9週目	学内外でのインタビュー	
10週目	ビジターセッション2回目（発表形式）	質問紙3
11週目	クラス内予選会 合同発表会	
12週目	会話試験：活動での経験（教師と1対1） 活動レポート（600～800字）提出	

4. 質問紙調査

4.1 目的と方法

中級クラスにおけるビジターセッションが、地域の人や地域の人とのコミュニケーションに対する学習者の意識にどう影響しているかを知るために質問紙による調査を行った。ビジターセッションによる学習者の意識の変化を見るために、表1のように、1回目のビジターセッションの前後と2回目のビジターセッション後の計3回、同一の質問紙を使用して調査を実施した。質問紙は英語で表記され、国籍や教室外での日本語使用時間、学内外での活動経験など様々な個人情報や問うセクション1と学習者の地域の人に対する印象や地域の人とのコミュニケーションに関する意識を問うセクション2、学習者の日本語、日本文化、日本語でのコミュニケーションなどに関する関心やビリーフなどを問うセクション3で構成されている。

セクション2では、「地域の人に対する印象」（7項目）と「地域の人とのコミュニケーションに対する意識」（6項目）を7段階評定で聞いた。セクション3では、10項目を5段階評定で聞いた。集計の際、セクション2では最も肯定的な回答を7点、最も否定的な回答を1点、セクション3では最も肯定的な回答を5点、最も否定的な回答を1点として点数化した。

4.2 対象者

調査の対象者はビジターセッションを実施した2011年秋学期の中級4クラスの学習者のうち、3回の質問紙調査すべてに回答した47名で、国籍の内訳は韓国31%、中国21%、タイ13%、ミャンマー、スリランカ、ベトナム、インドネシアがそれぞれ4%で、その他19%³となった。

現在どこに住んでいるかを尋ねたところ、34名（73%）が大学に併設された学生寮に、13名（27%）がその他市街地のアパート等に住んでいることがわかった。

また、1週間に教室外で日本語をどれぐらいの時間話すか尋ねたところ表2のような結果が得られた。この調査から

表2 1週間に日本語を話す時間

	学内	学外
1時間以下	9名	15名
1-3時間	21名	20名
3-5時間	7名	4名
5時間以上	10名	8名

³ ブルネイ、パキスタン、モンゴル、インド、フィリピン

は、学内では9名(約20%)の学習者が、学外では15名(約32%)の学習者が1週間に1時間以下しか話していないことがわかった。

4.3 質問紙調査の結果

質問紙調査の結果を表3に示す。表3のうち、1から7は地域の人に対する印象、8から13は地域の人とのコミュニケーションに関する意識、14から23は学習者の日本語、日本文化、日本語でのコミュニケーションなどに関する関心やビリーフなどについて聞いた結果である。それぞれの表に含まれるデータのうち、左側は質問紙2の結果から質問紙1の結果を引いたものを学習者ごとに計算して平均化したもの、右側は質問紙3の結果から質問紙1の結果を引いたものを学習者ごとに計算して平均化したものである。

表3 質問紙調査の結果

質問		ビジターセッション1 質問紙2-1 平均	ビジターセッション2 質問紙3-1 平均
What do you think about the local people?	1. Friendly	0.06	-0.33
	2. Kind	0.09	0.24
	3. Lively	0.04	0.17
	4. Sincere	0.06	-0.07
	5. Interesting	0.34	0.17
	6. Positive	0.09	0.33
	7. Easy to talk	0.28	0.30
What do you think about talking with the local people in Japanese?	8. I can do it well	0.00	0.30
	9. Not Scary	0.06	0.11
	10. Interesting	-0.26	-0.20
	11. I like it	-0.02	0.04
	12. Easy	0.21	0.63
13. Not stressful	-0.06	0.13	
14. I want to speak with many Japanese university students in Japanese.		-0.23	-0.09
15. I want to know what is going on in Japan.		-0.11	0.13
16. When international students talk to Japanese students, they should do so in Japanese.		-0.02	0.00
17. I have an interest in Japanese traditional culture.		-0.17	-0.02
18. I want to speak with many local people in Japanese.		-0.19	-0.09
19. I want to learn about the local area.		-0.02	0.00
20. It is important to speak politely.		-0.23	-0.15
21. I have an interest in Japanese popular culture.		-0.11	-0.26
22. When international students speak to local people, They should do so in Japanese.		-0.28	-0.09
23. I want to learn about Japanese people.		-0.04	0.00

この結果からわかるように、1回目のインタビュー形式のセッションの後の調査では、地域の人には「5. おもしろい」、「7. 話しやすい」といった項目で肯定的な変化が見られ、地域の人の人間的な魅力が評価されている。また、「12. 地

域の人と話すのは簡単だ」という項目でも肯定的な変化が見られる。2 回目の発表形式のセッションの後の調査では、地域の方は「2. 親切だ」、「3. 元気だ」、「5. おもしろい」、「6. 積極的だ」といった人間的な魅力が評価されているに加え、「8. 地域の人とよく話せる」、「12. 地域の人と話すのは簡単だ」といったように、自分の話す能力を評価する学習者が多かった。特に、「12. 地域の人と話すのは簡単だ」という項目においては、ビジターセッション前とビジターセッション後では有意差が見られた ($t(46)=-3.03, p<.01$)。以上の結果から、2 回のビジターセッションを通して、地域の人に対する印象や地域の人と話す自信が高まった学習者は多かったと言える。

一方、今回のビジターセッションを通して地域の人とのコミュニケーションに対する意識がどのように変化したかを見てみると、「10. 地域の人と話すことがおもしろい」、「18. 地域の人と話したい」という二項目のように、否定的な変化が見られるものや、「11. 地域の人と話すのが好きだ」のように変化が見られないものもあった。この結果から、今回の2 回のビジターセッションが地域の人とのコミュニケーションを促進できたとは言えないようである。

次に、どのような学習者が地域の人と話したいのかを調べるため、質問紙2 の回答を相関分析したところ、「18. 地域の人と話したい」と「17. 伝統文化に興味がある」の間で強い相関が見られた ($r=.80, p<.01$)。つまり、伝統文化に興味がある学習者は地域の人と話したい、あるいは地域の人と話したい学習者は伝統文化に興味を持っている可能性があると考えられる。また、学外で話す時間の長さやビジターセッションでの意識の関係を調べるため、質問紙2 の「学外での話す時間」とセクション2 と3 の回答での相関分析をしたところ⁴、「8. 地域の人とよく話せる」($r=.60, p<.01$)、「9 地域の人と話すのは怖くない」($r=.57, p<.01$)、「13. 地域の人と話すのはストレスを感じない」($r=.62, p<.01$)となり、中程度の相関が見られた。つまり、インタビュー形式のセッションは、学外でよく話す学習者ほど、怖さやストレスを感じず、自信を持てるようなコミュニケーションができたが、学外であまり話していない学習者にとっては、怖さやストレスを感じ、自信を持っていないような難易度の高いものだったと推測される。一方、これらの相関は質問紙3 では見られなかったことから、発表形式のセッションは、難易度の面で多くの学習者に受け入れられたものだったと思われる。

5. インタビュー調査の概要

5.1 目的と方法

以上の質問紙調査の結果をさらに考察し、ビジターセッションの意義や問題点を明らかにするため、1 回目と2 回目、1 回目と3 回目の質問紙調査結果の比較において総合的な意識の変化が顕著であった学習者12名を対象に教師が1 対1 でインタビューを行った。質問は以下の5 項目を中心に半構造化インタビューで行い、1 人の学生に対し30 分～1 時間程度の時間を要した。

- ①地域の人に対する印象は変わったか
- ②ビジターセッションで上手にできたこと及びその理由
- ③ビジターセッションで上手にできなかったこと及びその理由
- ④ビジターセッション1 回目と2 回目で感じた違い
- ⑤今後ビジターセッションでしたいこと

5.2 対象者

まず1 回目と2 回目、1 回目と3 回目の質問紙調査における結果の比較に見える意識の変化を以下のように分類し、その傾向が顕著に現れていた学習者各々3 名に対してインタビューを行った。

1. 1 回目と2 回目・3 回目の質問紙調査の比較結果において地域の人に対する印象や地域の人とのコミュニケーション

⁴ 1 時間以下を1 点、1～3 時間を2 点、3～5 時間を3 点、5 時間以上を4 点にして他の項目との相関を計算した。

に対する意識が高かった学習者 (以下「高-高」)。

2. 1回目と2回目・3回目の質問紙調査の比較結果において、1回目の意識は低かったが、2回目と3回目の質問紙調査の結果では意識が高まったことが確認される学習者 (以下「低-高」)。
3. 1回目と2回目・3回目の質問紙調査の比較結果において、1回目の意識は高かったが、2回目と3回目の質問紙調査の結果では意識が低下したことが確認される学習者 (以下「高-低」)。
4. 1回目と2回目・3回目の質問紙調査の比較結果において、1回目の意識が低く、2回目と3回目の質問紙調査の結果でもその傾向が維持される学習者 (以下「低-低」)。

インタビューを受けた学習者は表4に示す。

表4 インタビュー対象者

タイプ	学習者	出身地	性別
高-高	A	スリランカ	男性
	B	台湾	女性
	C	インドネシア	男性
低-高	D	韓国	女性
	E	韓国	女性
	F	フィリピン	女性

タイプ	学習者	出身地	性別
高-低	G	韓国	女性
	H	韓国	男性
	I	タイ	男性
低-低	J	韓国	女性
	K	韓国	女性
	L	モンゴル	女性

5.3 インタビュー調査の結果

ここではインタビューによる調査結果を前述の「高-高」「低-高」「高-低」「低-低」という順にまとめる。

<「高-高」型の学習者の回答>

①地域の人に対する印象は変わったか

「良い印象のまま変わらない (学習者 A, B)」、「はじめは話しくいと思っていたが、交流後は生活の中で挨拶等ができるようになった (学習者 C)」

②ビジターセッションで上手にできたこと

「アルバイトをしているので、地域の人には慣れていて。今回はたくさん話せたし多くの情報を得ることができた (学習者 A)」、「練習していたので、プレゼンテーションについての説明が上手にできた (学習者 B)」、「地域の人の雰囲気が良かったので、リラックスして話すスピードをコントロールすることができた (学習者 C)」

③ビジターセッションで上手にできなかったこと

「特にない (学習者 A, B)」、「発表内容を話し終わった後の話の進め方がうまくいかず会話が続かなかった (学習者 C)」

④ビジターセッション1と2で感じた違い

「ビジターセッション1では自分に (日本のお正月についての) 知識がなかったため、あまり情報を得ることができなかったが、ビジターセッション2では自分たちでいろいろ調べていたため、多くの情報を得ることができた (学習者 A)」、「ビジターセッション2の方が自信を持ってコミュニケーションできたが、きちんと説明しなければならぬという緊張から難しさも感じた (学習者 B)」、「ビジターセッション2の方が地域の人に興味を持って聞いてくれたので、楽しくてもっと知りたい、話したいという気持ちになった (学習者 C)」

⑤今後ビジターセッションでしたいこと

「1時間だけで終わる交流ではなく、キャンプのような形の交流もしてみたい (学習者 A)」、「日本の文化や伝統などもっと話しやすいトピックで話したい (学習者 B)」、「別府だけでなく、他の地域の人とも交流してみたい (学習者 C)」

<「低-高」型の学習者の回答>

①地域の人に対する印象は変わったか

「もともと地域の人には良い印象を持っていたが、会ってみたら、もっと印象が良くなった。また自分の国（韓国）や他の国について興味を持っていたので驚いた（学習者D）」、「良い印象のまま変わらない（学習者E）」、「日本語が上手ではないので、失礼になるのではないかと思怖かったが、会ってみると地域の人は親切で印象が良かった（学習者F）」

②ビジターセッションで上手にできたこと

「わからないとき相手に聞くことができた（学習者D）」、「初級の頃は日本語での会話に自信がなかったが、今回は日本語を使ってよく会話のできたので、自分は頑張っているという自信がついた（学習者E）」、「発表のこと以外にもいろいろな質問をされたが、よく答えることができたので、よかったと思う（学習者F）」

③ビジターセッションで上手にできなかったこと

「情報をどこまで伝えるかを考えていなかったの、相手の質問にうまく答えることができなかった（学習者D）」、「使用する語彙が難しかったので、とまどった（学習者E）」、「自信がないので、敬語を使わなかった（学習者F）」

④ビジターセッション1と2で感じた違い

「ビジターセッション1ではほとんど相手が話したが、ビジターセッション2では自分たちの準備ができていたので、積極的にコミュニケーションをとることができた（学習者D）」、「トピックが同じなので、違いは感じなかった（学習者E）」、「ビジターセッション1から2までの間に習った文法や語彙が増えた。そのためより良い説明ができたと思う（学習者E）」

⑤今後ビジターセッションでしたいこと

「自分の国について話したい（学習者D）」、「日本人が外国人についてどのように感じているか等について話したい（学習者E）」、「上級になったら政治等のトピックについて話したい（学習者E）」

これらの回答から「高-高」型「低-高」型の学習者の地域の人への印象は「良い印象のまま変わらない（学習者A, B, E）」のように元々良い印象を持っているか、「はじめは話しにくいと思っていたが、交流後は生活の中で挨拶等ができるようになった（学習者C）」、「日本語が上手ではないので、失礼になるのではないかと思怖かったが、会ってみると地域の人は親切で印象が良かった（学習者F）」のように、印象が変わったとしても良い印象に変化している。

肯定的なコメントとしては、「ビジターセッション2の方が地域の人が興味を持って聞いてくれたので、楽しくもっと知りたい、話したいという気持ちになった（学習者C）」、「自分の国（韓国）や他の国について興味を持っていたので驚いた（学習者D）」のように、ビジターが学習者側に対して興味を持っているということへの好感や驚きについて、「今回はたくさん話せたし、多くの情報を得ることができた（学習者A）」のように情報を得ることができたことへの満足感について言及する学習者が見られた。

また、「練習していたので、プレゼンテーションについての説明が上手にできた（学習者B）」、「ビジターセッション2では自分たちでいろいろ調べていたため、多くの情報を得ることができた（学習者A）」、「ビジターセッション2では自分たちの準備ができていたので、積極的にコミュニケーションをとることができた（学習者D）」といった自らの準備やそれが報われたことについての言及や、「初級の頃は日本語での会話に自信がなかったが、今回は日本語を使ってよく会話のできたので、自分は頑張っているという自信がついた（学習者E）」、「発表のこと以外にもいろいろな質問をされたが、よく答えることができたのでよかったと思う（学習者F）」、「ビジターセッション1から2までの間に習った文法や語彙が増えた。そのためより良い説明ができたと思う（学習者E）」といったように、自己の言語力の向上に関する言及も見られた。

一方で否定的なコメントとしては、「情報をどこまで伝えるかを考えていなかったので、相手の質問にうまく答えることができなかった(学習者D)」、「発表内容を話し終わった後の話の進め方がうまくいかず会話が続かなかった(学習者C)」、「使用する語彙が難しかったので、とまどった(学習者E)」、「自信がないので、敬語を使わなかった(学習者F)」のように言語能力や会話をするための戦略の不足に言及する学習者が見られた。

その他のコメントとしては、「1時間だけで終わる交流ではなく、キャンプのような形の交流もしてみたい(学習者A)」というセッションの形態に関する意見や「日本の文化や伝統についてもっと話しやすいトピックで話したい(学習者B)」、「自分の国について話したい(学習者D)」、「日本人が外国人についてどのように感じているか等について話したい(学習者E)」といったトピックの選択や、「別府だけでなく、他の地域の人もとも交流してみたい(学習者C)」というビジターのタイプに関する言及などがあつた。

以上のことから学習者の地域の人と話したいという意欲が高いあるいは上がった理由としては、相手が学習者に興味を持ち、更に情報を与えてくれる存在であったこと、そして、十分な準備をしたことで努力が報われたこと、自己の言語力の向上を感じたことが挙げられる。また、質問紙調査の結果では地域の人とのコミュニケーションを促進できたとは言えなかったものの、「高-高」型「低-高」型の学習者は、今後のビジターセッションで何をしたいかを聞いたさいに積極的にアイデアを述べており、今後のビジターセッションへの前向きな参加意欲が感じられた。一方で、「高-高」型「低-高」型であっても、全てを肯定的に捉えていたわけではなく、言語能力や会話をするための戦略の不足を感じる学習者もいたということがわかつた。

<「高-低」型の学習者の回答>

①地域の人に対する印象は変わったか

「シャイな人やずっとしゃべり続ける人などがいたが、地域の人の印象として変化したことはない(学習者G)」、「優しいと思っていたが、厳しかった。先生と学生という関係だった(学習者H)」、「良い印象のまま変わらない(学習者I)」

②ビジターセッションで上手にできたこと

「文法の正確さにとらわれないようにしているため、今回も自由に話せた(学習者G)」、「優しい人もいたため、厳しい態度の人に対しても自分の気持ちをコントロールして話せた(学習者H)」、「特にない(学習者I)」

③ビジターセッションで上手にできなかったこと

「失礼だと思い、相手の日本人女性に大きな声で話してほしいと言えなかった(学習者G)」、「厳しい日本人に怖くて自分の意見を言えなかった(学習者H)」、「周りの人の話すスピードが早くてついていけなかった(学習者I)」

④ビジターセッション1と2で感じた違い

「ビジターセッション1では相手の言葉でわからないものが多かったが、その後いろいろ調べたので、ビジターセッション2では相手の言うことがよく理解できた(学習者G)」、「厳しい日本人がいなかったため、ビジターセッション2の方が良かった(学習者H)」

⑤今後ビジターセッションでしたいこと

「若い人、年上の人など、順番にしてほしい。年上の人と話すことも必要だと思うが、年上の人には、交流授業ではなくて、教えてもらうという感じになってしまう(学習者G)」、「お互いやお互いの国についてもっと話したい(学習者G,H)」

<「低-低」型の学習者の回答>

①地域の人に対する印象は変わったか

「良い印象のまま変わらない(学習者J,L)」、「話しにくいという印象のまま変わらない(学習者K)」

②ビジターセッションで上手にできたこと

「優しい人たちだったので、日本人のおじいさんやおばあさんと抵抗なく話すことができた（学習者 J）」、「敬語を使うことができた（学習者 K）」

③ビジターセッションで上手にできなかったこと

「非常に年上の知らない日本人と話すのは緊張する。失礼だと感じるので、聞き返しが上手にできなかった（学習者 J, K）」、「敬語が上手に使えなかった（学習者 L）」

④ビジターセッション 1 と 2 で感じた違い

「ビジターセッション 2 では 1 人の学生がよく話していて、自分はあまり話せなかった（学習者 J）」、「どちらも同じ地域の人だったので違いは感じない（学習者 K）」、「ビジターセッション 1 では相手の言葉でわからないものが多かったが、その後いろいろ調べたのでビジターセッション 2 では相手の言うことがよく理解できた（学習者 L）」

⑤今後ビジターセッションでしたいこと

「今回のような内容が良いと思う（学習者 J, K, L）」

「高-低」型「低-低」型の学習者には、地域の人への印象として「良い印象のまま変わらない（学習者 I, J, L）」のように、既に良い印象を持っていて変化はないという者もいたが、「話しくいという印象のまま変わらない（学習者 K）」のように、もともと良くない印象を持っている者、「優しいと思っていたが、厳しかった。先生と学生という関係だった（学習者 H）」のようにビジターセッションに参加した結果、良くない印象を持つようになった者もいる。

肯定的なコメントとしては、「文法の正確さにとらわれないようにしてため今回も自由に話せた（学習者 G）」「敬語を使うことができた（学習者 K）」といった自己の言語能力についての言及や「ビジターセッション 1 では相手の言葉でわからないものが多かったが、その後いろいろ調べたのでビジターセッション 2 では相手の言うことがよく理解できた（学習者 G, L）」といった自らの準備やそれが報われたことについての言及が見られた。これらの点は、「高-高」型「低-高」型で見られたものである。

一方、否定的なコメントとしては、「高-高」型「低-高」型と同じように「周りの人の話すスピードが早くてついていけなかった（学習者 I）」や、「敬語が上手に使えなかった（学習者 L）」といった言語能力の不足に関する言及が見られたが、「失礼だと思い、相手の日本人女性に大きな声で話してほしいと言えなかった（学習者 G）」、「厳しい日本人に怖くて自分の意見を言えなかった（学習者 H）」、「非常に年上の知らない日本人と話すのは緊張する。失礼だと感じるので聞き返しが上手にできなかった（学習者 J, K）」のように地域の人への不安や遠慮の気持ちに関する言及も見られた。

このように「高-低」型「低-低」型の学習者はビジターを目上の人と位置付けることから、不安や遠慮を感じてしまう学習者がいるが、さらに「年上の人には、交流授業ではなくて、教えてもらうという感じになってしまう（学習者 G）」や「先生と学生という関係だった（学習者 H）」のように、「教える-教えられる」という関係について否定的に言及する者もいた。その他としては、「高-高」型「低-高」型と同じようにお互いやお互いの国についてもっと話したい（学習者 G, H）」といったトピックに関する言及もあったが、「高-高」型「低-高」型ほどビジターセッションに対する積極的なアイデアは聞かれなかった。

以上のことから、学習者の地域の人と話したいという意欲が低いあるいは下がった原因としては、もともと良くない印象を持っていたことや自らの言語能力の不足、年齢に起因する相手への不安や遠慮、「教える-教えられる」という関係を望まないことが挙げられる。また、今後のビジターセッションに対しては「高-高」型「低-高」型ほど積極的にアイデアを述べておらず、それほど強い参加意欲が感じられなかった。

しかし、「高-低」型「低-低」型の学習者は、ビジターセッションの全てを否定的に捉えているのではなく、「高-高」型「低-高」型と同じように、十分な準備をしたことで努力が報われたことについては肯定的に捉えていることもわかつ

た。

6. ビジターセッションの意義と問題点

以上、本研究では中級レベルを対象にして行った2回のビジターセッションに対して学習者がどのような意識を持ったのかを質問紙とインタビューで調査し、今後の中級のビジターセッションに向けてその意義や問題点を考察した。

質問紙の調査からは、2回のビジターセッションを通して地域の人に対する印象や地域の人と話す自信が高まったこと、インタビュー形式のビジターセッションでは学外でよく話す学習者ほど怖さやストレスを感じなかったこと、発表形式のビジターセッションでは学外でのコミュニケーション量が少ない学習者にも怖さやストレスが少ないことがわかった。また、質問紙調査では、ビジターセッションが学習者にとって積極的に地域の人と交流したいと思えるようなきっかけを与える場となっており、両者のコミュニケーションを促進するような効果を与えているとは言えなかった。

インタビュー調査の結果からは相手が学習者に興味を持ち、更に情報を与えてくれる存在であったことから、地域の人に対して学習者が良い印象を持つきっかけにはなっていることがわかった。また、前述のようにインタビュー形式のビジターセッションは、学外であり日本語を話さない学習者ほど怖さやストレスを感じたという問題があったが、インタビュー形式と発表形式の2回のビジターセッションの機会を提供することで、達成感や自己の言語能力の向上を感じる機会を与え、地域の人と話すことへの自信にも繋げられたこともわかった。そして、ビジターセッションの前後において地域の人に対する印象や地域の人とのコミュニケーションに対する意識が高かった学習者、あるいはビジターセッションの後でそれらが高くなった学習者に関しては、今後のビジターセッションに対して前向きな参加意欲が感じられた。

一方、APUの中級レベルにおいてビジターセッションを実施する際に、教師が考慮すべき問題も明らかとなった。学習者の中には、ビジターセッションで言語能力や会話をするためのストラテジーの不足を感じた者もいた。これらを軽減するためには、学習者が無理なく自然なコミュニケーションを行えるよう、事前にクラスで練習しておくなど十分な準備が必要である。特に、インタビュー形式の場合は学習者によって、感じる怖さやストレスに大きな違いがあるため、学習者に馴染みが薄く、未習語彙が多くなると予想されるトピックでは発表のような事前準備ができる形式で行うことで、学習者の怖さやストレスが緩和できるだろう。

また、学習者はビジターに対して不安や遠慮などを感じており、相手との相性やバラエティーについても気にしていることがわかった。ビジターセッションでは、ビジターと学習者が「教える-教えられる」といった関係に陥りやすく、対等な関係であるほうが望ましいという指摘もある(関2007)。しかし、APUのビジターセッションでは、目上の人との交流の中で大学生同士のコミュニケーションとは違った、実社会におけるコミュニケーションを経験し、そのような場面でのストラテジーを学ぶというねらいもある。したがって、APUの場合は学習者とビジターの対等な関係をどう築くかを追求するのではなく、まずは学習者に上述したビジターセッションの意義を説明し理解してもらうことが重要であると考える。また、インタビュー形式は「教える-教えられる」関係が顕著に表れてしまうため、それを取り入れるのであれば今回のようにインタビュー形式と発表形式を組み合わせることも大切である。

さらに、扱うトピックについても学習者の動機づけを高められるように工夫し設定することが必要であろう。学習者が関心を持っていることを事前に調査しておく努力や日本について学ぶだけでなく自分の国についても紹介できるような相互性を有したテーマを設定することも効果的だろう。また、伝統文化への関心と地域の人と話したいという気持ちには相関が見られたことから、日本の伝統文化に対する興味を喚起することでビジターセッションの効果を高められる可能性もあるだろう。

7. おわり

以上のように本研究ではビジターセッションの意義と様々な問題点が明らかとなったが、ビジターセッションの意義の

一つとして考えてきた「地域の人との交流をしたいという意識」の促進にはまだ課題があることがわかった。

今後は、いかにして学習者の地域の人と交流したいという意識を高めさせるかに焦点を置きながら、地域の大学としてのビジターセッションの在り方を検討していきたい。

参考文献

- 板橋民子（2011）「学習者が中級活動発表を通じて学んだこと：CM制作活動報告」『ポリグロシア』21巻 109-122
- 関真美子（2007）「初級レベルのビジターセッションにおける学習者とビジターの「対等な関係」作りービジターへの「働きかけ」の試みー」『WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告』
- J.V. ネウストブニー（1991）『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- トムソン木下千尋・舛見蘇弘美（1999）「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者ーその問題点と教師の役割ー」『世界の日本語教育』第9号 15-28